

PASS

季節はずれの大雨が屋根を叩いている。冬のみぞれまじりの雨は、意地悪く、足元からしんしんと冷え込む寒さを連れてくる。猫が屋根裏へ入り込んで走り廻るせいで、天井の羽目板の何枚かがゆるんで隙間が見えている。こんな夜は早く眠ってしまうに限る。そう思い、毎夜見ているニュース番組もまだ始まらない時間だというのに、さっさとベッドに入り、気持ちよく眠りについた。静まり返った夜半、息もできない胸苦しさに目が醒めた。重く黒い塊りがずっしり覆い被さっている。雨のせいで夜の散歩をそうそうに引き上げてきた飼い猫が、私の胸の上で眠りこけている。ひげで鼻もくすぐったい、腹を立てて猫を追い払うが、まだ顔の周りがくすぐったい。これまた季節はずれの蠅がぶんぶん飛び廻っている。それに気色の悪い生暖かい風。天井のゆるんだ羽目板がゆらゆら揺れて見える。見渡すと、風は部屋全体に吹いている。「今晚は、また君の邪魔をしてしまったようだね」悪魔が部屋の隅で足を組み、腰を掛けて笑っている。いつも通り真っ黒な衣装を身につけ、手には脅しの大きな鎌を光らせている。「あなたでしたか。これからどこかへお出掛けですか？」私は不機嫌を押し殺して挨拶した。「いや、今は帰り道だね。夕べ行きがけにここを通った時、君は大口を開けて寝込んでいたよ。柄の悪い猫どもと一緒にね。茶色くて一番体の大きい。今もそこにいるな、ふん、私に向かっ歯を剥き出して唸っていたよ。我々の手下の躰のいい上品な黒猫達とは大違いだ。ふん、まあ結構です。そういう事にして置きましょう。それでどこへお出掛けだったの？」「うむ、ちょっと、神様のところへね」「ええ？悪魔が神様のところへ行くんですって？」「新年のあいさつなのだよ」「へえ？」「私の事はともかく、君は今年になって神様のところへいったのかね？」「神様のところへって、初詣のことですか？」「初詣だって？人間どもがぞろぞろと手前勝手な願い事をしに出掛けておみくじを引くあれかね？まったく、あきれたものだ」「じゃあ、あなたは神様のところへなんの用で行くんです？」「悪魔は、頭からすっぽりと被っていた三角頭巾をとって咳払いをした。もうすっかり見慣れた光景だが、頭巾を脱いだ悪魔はなんともしまらない。「我々にはいろいろ話し合うことがあるのだよ。首脳会談といったところだ。君のようなものに理解できないのも無理はないがね。我々はこの世界の光と闇という重要な問題をだね・・・」「へえ、本当ですか？そんなこと言って本当は僕達の初詣とそんなに変わらないんじゃない？」「悪魔はついにマントも乱暴に脱ぎ捨てた。「なんだって！冗談じゃない。我々は今も真剣に話し合ってきたところなのだよ。我々は折り合いをつける必要があることをね。それもこれも君達人間が、と、と、とんでもない事ばかりしてかすから・・・ま、ま、ま、ま」悪魔は怒りのあまり最後まで話すことはできなかった。しばらくすると、部屋の中はごうごうと黒い風が渦を巻いて吹き荒れた。風がおさまると、悪魔は消え、部屋はめちゃくちゃになっていた。

でも、ま、しょうがないかな・・・今夜のところは・・・

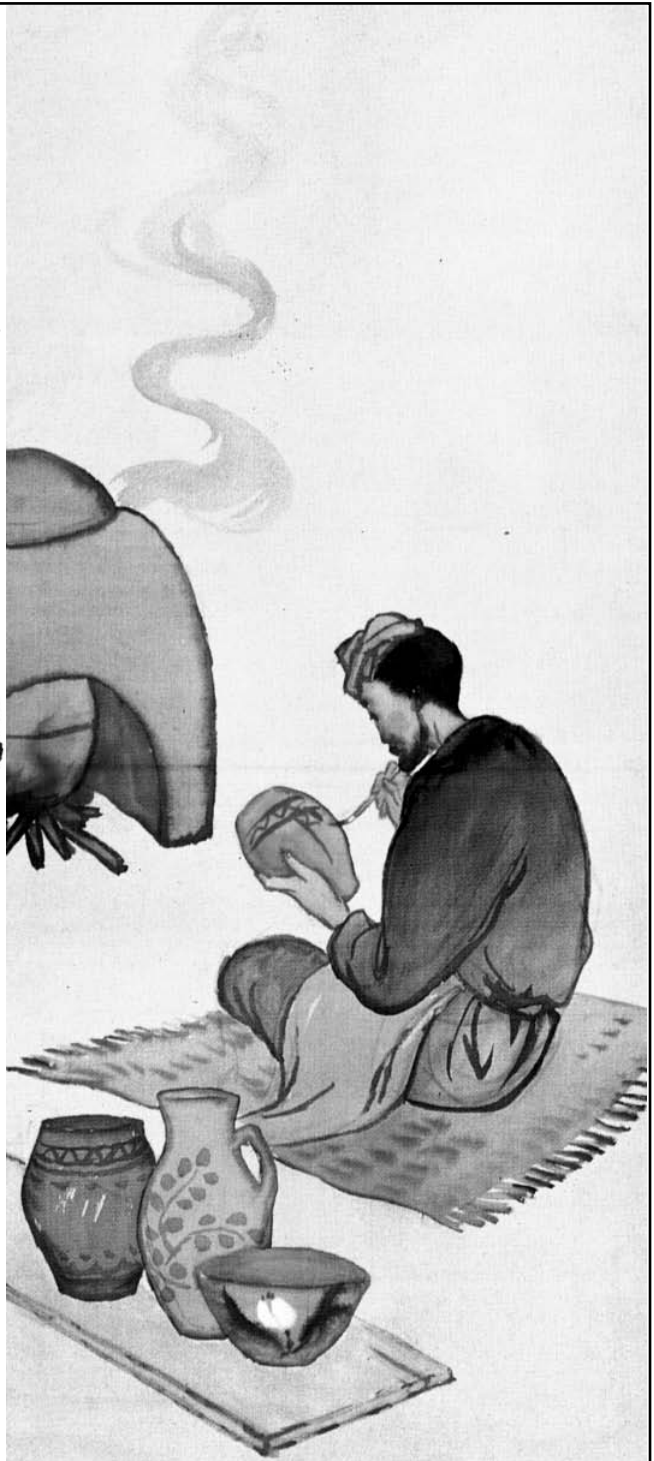
COLUMN

鎌倉の猫事情 第二十五話

スイーピーちゃんの2度目の懐妊を梅野家の人たちはまだ知る由もありませんでした。家族として仲良く暮らしていた猫や犬や動物達を次々と失った悲しみは未だ癒えません。梅ちゃんは今でも仕事を終えた夕暮れになると、いつものように缶ビールで晩酌をしています。ビールを手にする時、可愛い猫達のお刺身をねだる声が聞こえるような気がしてなりません。やっとな一人歩きをするようになったチビ達も、少し大きくなると親の後に着いてよたよたと駆けて来たものでした。梅ちゃんは大きな猫達に混じって大きな頭をふりふり懸命におかずを食べる子猫たちの元気な姿を見ると、一日の疲れも嫌なこともなくなるような気がしていました。本当に幸せだと思えるひと時だったのです。もちろん奥さんのみち子さんも



同じ気持ちだったでしょう。あの元気な猫達の鳴き声はもう聞こえてはきません。梅ちゃんは悔いていました。最初に子猫のみじめちゃんがなくなった時、梅ちゃんは母親の黒猫に「子猫を探しておいで」と言ったのです。黒猫は子猫を探しに出掛けました。そして、その次の朝、家の前の電柱の側に冷たくなって横たわっていたのです。その姿を一目見て、うかつに口にしてしまった言葉をどんなに悔やんだかわかりません。その上、のんきに暮らしていた父猫までもが家族の後を追うようにして・・・梅ちゃんは、言います。「あの子猫はいつも元気でトラックの荷台に乗って遊ぶのが好きだったからな。きつと通りがかりのトラックの荷台に乗ってそのままどこかへ行っちゃったと思うよ。きつとどこかの町で元気に可愛がられているのさね」無理もないのです。梅ちゃんの家は大きなトラックが一日中行き来する産業道路のまん前にあるのです。人間で言えば、ドアを開けるとすぐ目の前が高速道路のようなものです。世慣れていない猫達はひとたま



りもありません。本当に、みじめちゃんはどこか知らない町で元気に生きているのかもしれない。みじめちゃんは、スイーピーの実の妹です。私達にとっても他人事じゃないのです。まだ産まれてまもない小さな頃、二匹は見た目もそっくりでした。白色で、薄い灰色の縞模様で青い目の可愛い子でした。少し目と目の間が広い何かで器量がよく見えなかったのも確かです。梅ちゃんは器量の悪いみじめちゃんをいっそう可愛がったものです。そして今ではスイーピーの赤ちゃんを心待ちにしているのです。スイーピーのお腹は、最初のお産で産んだ一粒種の女の子を育てる傍ら、どんどん大きくなっていきました。私達は半信半疑でした。最初のお産をすませてから丁度2ヶ月後、スイーピーのお腹はもう疑いようもなく、大きく膨らんでいました。それに、どう考えても一度目の時よりは大きくなっているようです。私達の疑問は、不安に変わり、そして大きな期待になりました。

to be continued